



### 校歌

作詞 寺田 彰司

- 一 千秋の雪積もりたる  
富士の高嶺の雄姿ぞ  
幾万代の後までも  
変わらぬ誠の鑑なる
- 二 奔流百里石をかみ  
巖に激しいや増しに  
勢加わる利根の水  
これ剛健のためしなり
- 三 あ、此の山と此の川と  
日夕眺むる健男児  
自然の示す巨人をば  
如何に学ばん習わなん
- 四 白幡台の雪月花  
四季の折々常総の  
平野にしるく輝くは  
高潔無垢の別天地
- 五 石段登る六十余  
一足ごとに踏みかため  
心を鍛え身を練りて  
忠良有為の基たてん



目次	
会長挨拶	2
校長挨拶	2
平成27年度総会報告	3
平成28年度総会案内	4
同窓会便り	4
母校の想い出	6
母校と私の人生	10
多士済々	14
トピック	15
同窓会会員名簿発行	16
事務局から	16
所蔵美術品紹介	16
進路状況	17
先輩の語る仕事を聴く会	18
教室から	18
部活動状況	19
部活動奨励金贈呈式	19
百十五周年SSH記念講演会	20
キャリアアサポートプラン	20
生活体験発表会	20
編集後記	20

### ご挨拶



白幡同窓会会長  
染谷 信洋

白幡同窓会会員の皆様には  
ますますご健勝にてご活躍の  
こととお慶び申し上げます。

日頃本会並びに母校の充実  
発展のため深いご理解と温か  
いご支援を賜り衷心より感謝  
申し上げます。

本年四月四日(土)、竜ヶ  
崎一高体育館において同窓会  
総会が開催されました。総会  
前には昨年同様、在校生の吹  
奏楽部によるすばらしい演奏  
と応援団及びチアリーダーか  
らのエールで総会を盛り上げ  
ていただきました。

なお本年は役員改選の年に  
当たり、会長副会長が交代し  
ました。そして齋藤佳郎前会  
長の後任として、私が大役を  
お引き受けすることになりま  
した。もとより浅学非才、身  
に余る大役で文字どおり身の  
引き締まる思いであります  
が、皆様のご支援をいただき、  
役員一同力を合わせて精一杯  
務めてまいります。どうぞよ

ろしくお願いをいたします。  
今回勇退された齋藤佳郎氏  
並びに副会長を退任された横  
須賀英明氏には、長年のご貢  
献に敬意を表するとともに心  
から感謝申し上げます。

また、総会においては、  
招待学年の高十八回生、高  
三十三回生、高四十八回  
生、高五十八回生並びに定  
時制十四回生、二十九回生、  
四十四回生、五十四回生の出  
席者の皆さんに陶芸家植竹敏  
氏(高二十七回)作製の湯飲  
みを記念品としてお贈りしま  
した。総会の審議・承認事項  
等については「総会報告」の  
欄をご覧ください。

同窓会活動の活性化のため、  
校外幹事の皆さんにお骨  
折りをいただいております  
が、お陰様で会報も年内に会  
員の皆様のお手元にお届けす  
ることができるようになりま  
した。その会報も年々充実し  
ていますが、これも偏に会員  
の皆さんがご多忙にもかかわらず  
早く快く協力してくださって  
いるお陰と有り難く感謝いた  
しております。

六月の白龍祭には、同窓会  
会員有志が参加して餅つき大  
会を行い、販売したところ二  
時間弱で完売しました。売上  
金は生徒会に寄付しました。

この参加理念は、少しでも「顔  
の見える」同窓会にしたいと  
いう有志の思いがこもったも  
のです。

後輩の皆さんの活動に関し  
ては、折にふれ校長先生はじ  
め職員の方からご案内を  
いただいております。先生方  
の熱心なご指導については、  
心から感謝申し上げます。

本会では、文武両面にわ  
たつて、関東大会以上の大会  
に出場する生徒に対して「奨  
励金」を贈呈しています。今  
年も私が代表し、壮行会に出

### 「白幡」の絆



校長  
小沼 光一

染谷信洋会長をはじめとい  
たしまして、白幡同窓会会員  
の皆様には、日頃より本校の  
教育活動に對しまして、格別  
のご理解とご協力を賜り、厚  
くお礼申し上げます。特に、  
長年にわたり白幡同窓会のた  
めにご尽力いただきました齋  
藤佳郎前会長には、重ねて厚  
く感謝申し上げます。

席して贈呈してまいりまし  
た。

本会ではまた、会員相互の  
親睦を図ることを目的として  
五年に一度同窓会会員名簿を  
発行しています。本年度は当  
該年となり、この会報と前後  
して、ご希望いただいた皆様  
のお手元にお届けします。

最後に、会員の皆様のます  
ますのご多幸ご活躍と母校の  
さらなる充実発展をご祈念申  
し上げて、ご挨拶といたしま  
す。

本校は、明治三十三年(西  
暦一九〇〇年)に茨城県土浦  
中学校龍ヶ崎分校として開校  
以来本年度、創立一五周年  
を迎えることとなりました。

平成二十二年に創立一〇  
周年を迎え、その年度に県教  
育委員会より「いばらき版  
サイエンスハイスクール(ISH)  
」に指定され、「医学・  
難関理系進学コース」が設置  
されるとともに、この年度の  
新入生から全クラスが国公立  
大学進学クラスとなりました  
。その結果、今春の卒業生  
は一人が国立大学合格  
を果たすなど、近年、現役で  
の国立大学合格者一〇〇名  
を超える実績を残しております。

す。

昨年度、文部科学省より  
「スーパーサイエンスハイス  
クール(SSH)」として五  
年間の指定を受け、二年目と  
なる今年度は、SSHの中心  
となる二年生の課題研究やハ  
ワイ研修などが実施され、創  
造性豊かで国際的な視野に  
立った人材の育成を目指した  
「輝く『め』プロジェクト」  
の一層の充実が期待されま  
す。

一方、昨年度は二十七年ぶ  
りに体育祭を復活させ、今年  
度、第一回音楽祭を開催する  
ことで、「白龍祭、飛龍祭(体  
育祭)、音楽祭」の三つを軸  
に、学校行事の一層の活性化  
を図っているところです。部  
活動においても、全国大会常  
連となっている射撃部、ソフ  
トテニス部、陸上部や、春夏  
あわせて十回の甲子園出場を  
誇る硬式野球部等を中心とし  
て、熱心な活動を行い、昨年  
度、県高校総合体育大会学校  
別得点男子の部で県立高校一  
位となるなど、校是である「文  
武両道」は脈々と受け継がれ  
ています。また、定時制課程  
においては、県教育委員会と  
連携した「生徒・保護者・教  
員のためのキャリアサポート  
プラン」による「キャリアセ



「ミニナー」を実施するなど、キャリア教育の一層の充実を図っているところだ。

全日制課程と定時制課程あわせて二四、五七五名の卒業生を誇る竜ヶ崎第一高等学校は、一五年の伝統の上に、「スーパーサイエンスハイスクール(SSSH)」という日本の教育の先駆けとなる事業を推進し、新たなステージを歩み始めています。白幡同窓会の皆様には、本校教育活動に對しまして、一層のご支援をお願い申し上げます。

昨年度の同窓会会報「白幡」の発行後、旧職員や白幡同窓会会員である教え子からもこの会報が縁となり数多くの連絡を受けることができ、私自身、旧交を温めることができました。この同窓会会報「白幡」が会員相互の絆をより強くするとともに、白幡同窓会会報の益々の発展・充実に繋がることを祈念いたします。て、あいさついたします。

### 総会報告

平成二十七年度の白幡同窓会総会が四月四日に竜一高体育館で開催されました。開式の言葉に続いて、応援団とチアリーダーによる校歌と応援歌の斉唱の後に、恒例の吹奏楽部による演奏の披露がありました。出席者はアイガウデン下平での懇親会を含めて百四十余名でした。今年度の招待学年は高校十八回、三十三回、四十八回、五十八回と定時制十四回、二十九回、四十四回、五十四回でした。審議・報告事項は次の通りです。

- 一 平成二十六年事業・決算
- 二 平成二十六年会計監査報告
- 三 役員改選
- 四 平成二十七年事業・予算案
- 五 学校概況報告  
進学・部活動の状況について

- 【本部役員】**
- 会長 染谷 信洋 (高15)
  - 副会長 小倉 培夫 (高20)
  - 副会長 大和佐知雄 (高28)
  - 監事 関口 広行 (高26)
  - 監事 山田 實 (高26)

### 平成26年度白幡同窓会収支決算書

収入総額 15,795,732円 支出総額 5,053,459円 差引残高 10,742,273円 (平成27年度へ繰越)

科目	本年度予算額	本年度決算額	比較		摘要
			増	減	
1 繰越金	10,617,944	10,617,944			平成25年度より繰越 内訳 定期① 5,961,809円 常陽銀行 定期② 1,653,981円 水戸信用金庫 (H26.8.6 解約) 定期③ 1,253,891円 水戸信用金庫 会計用 1,748,263円 常陽銀行 普通預金 預金用 0円 常陽銀行 普通預金
2 入会金	1,812,000	1,812,000			全日制 6,000円× 277名 = 1,662,000円 定時制 6,000円× (19+6)名 = 150,000円
3 協力金	2,000,000	3,252,006	1,252,006		ゆうちょ銀行扱い分 (26.3.7 ~ 27.3.6) 873件 1,667,100円 - 手数料 102,850円 コンビニエンスストア入金分 (26.3.7 ~ 27.3.6) 933件 1,761,000円 - 手数料 107,244円 現金預かり分 10件 34,000円
4 雑収入	1,966	113,782	111,816		5回卒業寺田さん (50,000円) ・25回卒業生 (52,000円) から寄付金 定期預金利息 定期① 1189円、定期③ 251円、定期 ②解約利息 142円 普通預金利息 200円、名簿売上 9,000円、記念誌 売上 1,000円
計	14,431,910	15,795,732		1,363,822	

科目	本年度予算額	本年度決算額	比較		摘要
			増	減	
1 事務費	280,000	294,735	14,735		
1 消耗品費	10,000	3,708		6,292	定期残高証明書、合鍵代、振込手数料
2 印刷通信費	250,000	291,027	41,027		総会案内用往復葉書・宛名ラベル代、 同窓会用封筒印刷、会報原稿依頼郵送料
3 旅費	20,000	0		20,000	
2 事業費	4,500,000	3,578,245		921,755	
1 総会費	200,000	155,586		44,414	総会経費補助
2 施設補助費	0	0			
3 会報発行費	2,500,000	2,418,159		81,841	会報26号印刷代 (582,940円) 会報郵送代 (1,835,219円)
4 会議費	100,000	118,500	18,500		幹事会経費
5 招待学年記念品費	0	0			
6 卒業記念品費	200,000	151,000		49,000	卒業記念品代 (卒業生へ証書用筒)
7 部活動奨励金等	1,300,000	475,000		825,000	※ 20,000円 + 5,000円 × 出場者人数 (10万円限度) 関東 (陸上部、射撃部、ソフトテニス) 全国 (射撃部、ソフトテニス)
8 国際交流基金	200,000	260,000	60,000		国際交流補助 (平成26年度 ~ 28年度)
3 慶弔費	350,000	185,200		164,800	賤別金 (25年度定期異動12名)、顧問葬儀香料等
4 予備費	9,301,910	995,279		8,306,631	SSH講演会講師謝金補助、同窓会空調設備、棚、 チャアールユニホーム代、生徒研究発表会経費
計	14,431,910	5,053,459		△ 9,378,451	

- 【校外幹事】**
- 幹事長 大野 英二 (高11)
  - 副幹事長 小嶋 豊 (高10)
  - 副幹事長 宮本 正俊 (高10)
- 顧問 野口武太郎 (中高)
- 顧問 齋藤 佳郎 (高8)
- 顧問 横須賀英明 (高10)
- 事務局 矢口 博 (高29)
- 幹事 木野内昭治 (高13)
- 服部 俊夫 (高25)
- 倉持 正男 (高27)
- 篠塚 文男 (高28)
- 横田 久 (高28)
- 櫻井 篤美 (高29)
- 大野 雅之 (高30)
- 大野 雅彦 (高31)
- 福田 道義 (高31)

※校内幹事は十三名です。

- 本田 仁子 (高31)
- 山崎 睦 (高31)
- 海田磨起代 (高36)

平成二十八年度

総会の案内

平成二十八年度の総会は四月二日(土)に竜一高体育館にて開催予定です。今回ご案内の往復葉書を差し上げるのは、各卒業回の幹事の方々と、招待学年の高校十九回・三十四回・四十九回・五十九回及び定時制十五回・三十回・四十五回・五十五回の卒業生全員です。お誘い合わせの上、多数の同窓生の参加をお待ちしています。

なお、招待学年の出席者の方には、陶芸家・植竹敏氏(高27回)作製のオリジナル校章入りの「白萩釉鍋湯呑」を記念品として贈呈いたします。招待学年以外の同窓生の参加は例年少ない状況ですので、是非参加をお願いいたします。総会終了後には、例年通り懇親会を竜一高下のアイガーデン下平で開催する予定です。

同窓会 便り

高校第二十六回

今年還暦を迎える竜ヶ崎第一高等学校第二十六回卒業生同窓会が開催されました

赤石 守

平成二十七年十月十七日(土)十七時から、竜ヶ崎第一高等学校第二十六回卒業生同窓会が市内「喜仙」において開催されました。

第二十六回卒業生は、大



半が昭和三十年または昭和三十一年生まれのため、今年度六十歳を迎えることになりました。白幡台の学び舎を昭和四十九年三月に十八歳で卒業した我々も、四十二年が過ぎ、信じられないことですが還暦の年となったのです。これまで四年毎にオリンピックが開かれる年に同窓会を開催することで検討しておりましたが、同窓生と会うたびに、「還暦の節目の年だから開催しよう。」との話が出てきておりましたので、今年第二十六回卒業生同窓会を開催する運びとなった次第です。

今回の同窓会には、齋藤佳郎先生、横須賀英明先生、石神由範先生、大崎高嗣先生、藤沢宏至先生の五名の恩師の出席を得て、また、第二十六回卒業生は八十四名の参加があり盛大に開催されました。発起人代表関口広行氏の挨拶、恩師の先生方の挨拶、記念写真の撮影、そして乾杯と、同窓会は粛々と進められていきました。しかし、時間が過ぎていくうちに、実年齢は六十歳ですが、気持ちは十八歳という、ある意味トランス状態となって盛り上がり過ぎていきました。「久しぶり。」「あなたは誰?」

高校第三十二回

宮本 順紀

「俺だよ、俺。」日頃から頻りに会う仲間同士もいるし、高校卒業以来初めて顔を合わせた同窓生もいたり、名前と顔が一致すると、高校の時の文化祭の思い出だったり、部活動の思い出だったり、やんちゃをしたクラスの思い出だったり、高生当時の話に花が咲いています。いくら話しても話し足りません。料理を食べることも忘れ、もちろんお酒は酌み交わしていましたが、会場のいたるところで旧交を温める姿が見られました。夜も遅くなってきました、

まったく解散する気配もありませんでしたが、最後に竜ヶ崎第一高等学校校歌を声高らかに歌い、閉会となりました。もちろん名残尽きない面々は、高校時代を過ごした龍ヶ崎の街に繰り出そうと、還暦とは思えない元気で夜の街に歩いて行きました。

今回の第二十六回卒業生同窓会は四回目の開催でしたが、いろいろな方の協力があつて、盛大に開催することができました。出席して下さいました先生方、そして第二十六回卒業生の皆様に改めて感謝申し上げます。

八月八日(土)に第三十二回高校卒同窓会を、アイガーデン下平で開催しました。同窓生八十一名が参加しました。卒業時にご指導を賜った渡邊雄一先生、齋藤佳郎先生、麻生太治郎先生、藤沢宏至先生、磯洋先生にご多用のところご臨席賜り、たいへんにごやかな会になりました。愛知県や四国から参加した同窓生もいましたが、中にはイタリアからはるばる参加した同窓生や海外出張を途中で切り上げて参加した同窓生もいました。昨年度同窓会総会招待学年であつたにもかかわらず参加者が少なくさびしい思いをしたことから、実行委員会を立ち上げて準備を進めてきた努力が報われました。参加者全員に実行委員会が作成したオリジナルタオルが配られました。

年を重ねて大人になった同窓生同士、名札をもっとお互いの顔を思い出し、三十年以上の年月の重さや時の流れの速さを実感しました。当時の生徒会長は誰だったかということが、準備段階で実行委員の間では少し話題になってい



ましたが、皆記憶があいまいではつきりしませんでした。しかし、参加してくれた辻君に尋ねると、辻君が副会長で、会長は今回参加できなかった若松君であったということがわかったというエピソードもありました。

久しぶりに再会した仲間たちと時間の許す限り語り合い、二次会にも六十三名が参加し、さらに常磐線利用者の同窓生は三次会も多数参加で実施しました。

当時の応援団のメンバーを中心に、竜ヶ崎一高でのよき思い出を胸に校歌を声高らかに歌い、お互いの健康と多幸を祈り、再び同窓会で会うことを誓って会を閉じました。

### 高校第三十三回

友信 勝美

平成二十七年四月四日(土)、白幡同窓会に招待者の一人として参加してきました。今回の招待学年は、昭和四十一年卒十九名、平成八年卒二名、平成十八年卒十名、そして、私たち高校三十三回、昭和五十六年卒四十二名といった、複数年での招待となり、本部役員の方々、先生、幹事などを含めると優に一〇〇名を超える参加者の中での総会となりました。

校舎は私立と見間違えうほど洗練されたものになっていましたが、私たちの在学前くらいにおそらく竣工した会場の新体育館は、当時のまま残っており、感慨深く思い出に浸ることができました。私たちの頃にはおよそ想像もできなかったチアリーダーに迎えられた時は、驚きとともに時代の流れを実感しました。とても楽しく心地よい時間でありました。

私たちは、少し前から三年くらいを周期に同窓会を重ねております。そのおかげもあって、連絡が取りあえる関係が多く、さらに世話人が地元

あり、まとまりはいい方だと思っております。懇親会はさらに増え、六十三人の参加となり増えました。旧中卒の方々も交えながら、下平の二階会場いっぱい参加者で懇親会も大いに盛り上がりました。大野英二先生や持丸修一先生の元気なお姿にもお会いでき、仲間とともにいい思い出となり、また励みにもなりました。

懇親会では取まらず、その後私たちは二次会に突入。さらにヒートアップ、ここからの参加者もあり、宴は深夜まで続きました。

この間亡くなられた仲間もあり、こうした機会が貴重であることは歳を重ねることに実感しています。今は連絡が取れなくとも、いざれ再会できる仲間もいるかもしれませぬ。その時を楽しみに、私たちはこの場所で飲み会を重ねていきたい、と思います。

時間のない中、参加者への連絡や事前準備などに奔走してくれた皆さん、本当にご苦労様でした。参加して下さった先生、仲間の方々、そして、この機会を設けて下さったすべての方々にお礼申し上げます。今後ともよろしくお願ひいたします。



### 高校第五十五回

関 達則

ら約半年の準備を経て、平成二十七年一月二日、柏市のシャンティにて第五十五回生同窓会が開かれました。

遠藤&脇山の名司会の元に幕を開けた同窓会は、当時お世話になった野口先生、村松先生、中澤先生、浅野先生、矢口先生をお招きし、野口先生の乾杯のご発声の元、盛大に始まりました。今回同窓会の参加者は百二十名を超え、幹事たちの当初の目標百名を大きく上回り、感謝感激でありました。卒業から十二年という月日が経っていましたが、皆顔を合わせれば一瞬にして当時に戻るようで、話も弾み楽しい時間を過ごすことができました。会の後半ではクラス対抗クイズ大会で懐かしの因数分解をしたり、卒業アルバムのスライドを観賞したりと、十二年ぶりの高校生気分

全てはこの一言から始まりました。それは昨年四月のこと。「同窓会やろうよ」という奈良君の言葉をふと思いついた僕と木村君は、勢い半分で同窓会を計画。ただここで早々に問題が発生！男クラの片隅でひっそりと高校生活を送っていた僕らだけでは、どうにもならんぞ！という事実が判明。そこで、言い出しつ

べ奈良君に加え、海老原さん、関口さん、中村さん、丸山さん、脇山君、遠藤君に協力をお願いして幹事会を発足することとなったのです。それか

あつという間の三時間が過ぎ、気がつけば会も終盤。久々の竜一校歌を歌いながら感じたことは、こうして共に昔を懐かしめる、思い出を共有できる仲間がいるというのは、素晴らしいなことでした。僕たちを結びつけてくれた竜ヶ崎一高に感謝です！最

後に、今回参加して下さった先生方と同級生にこの場を借りて御礼申し上げます。



### 吹奏楽部OB・OG会

松本 光弘(高36回)

三月二十二日(日)に吹奏楽部OB・OG会の集まりを「魚よし」で開催しました。開催日まで一か月を切つてからの案内と日曜日の夕方からの開催ということもあり、参加者が大変少ないのではと心配もしましたが、二十七名もの卒業生が集まりました。集まった年代も高二十四回卒の初代指揮者の先輩から高四十六回卒までこれまでで一番幅広くなりました。

会場に入ると懐かしの顔を見つけてさっそく思い出話を

始め、宴会の開始前にはすでに盛り上がっていました。集まった年代の幅広さもあり、初めて顔を合わせる先輩

後輩も多くいましたが、年代ごとに自己紹介と近況報告なども行い、宴が進むにつれ年代の垣根を越え昔話に花が咲きました。

さらに、現役当時に先輩が撮影してくれた写真も登場し、若かりし頃の自分に懐かしさと恥ずかしさを感じながらも当時の思い出が鮮明によみがえってきました。

とても盛り上がった楽しい宴の時間はあっという間に過ぎ、その後時間が許すメンバーで終電後まで語り合いました。

吹奏楽部では一時は卒業生が集まってOBバンドを結成し、コンサートを開催したこともありましたが、みな社会人となり練習に顔を出すことが難しくなったことなどもあり、残念ながら数年で終了してしまいました。その後、同期だけで同窓会を行っていた年代もありましたが、年代の枠を超えて集まる機会はほとんどありませんでした。

しかし、先輩方が近い年代に声をかけ集まるようになってきたことをきっかけに、徐々に

先輩から後輩へ、後輩から先輩へとお誘いがかり年を追うごとに参加する年代が多くなってきました。

さらに開催日も母校吹奏楽部の演奏会を見に来る卒業生も多くなることから、母校吹奏楽部の定期演奏会当日として開催してきました。

開催計画や準備も当初集まりを計画した先輩方にお任せの状態が続く、お忙しい先輩方も都合がつかず開催しない年もあり不定期での開催が続いていましたが、今後は私も積極的にかかわる一方、各年代にも幹事をおいて、定例での開催を目指すとともに多くの卒業生に参加を呼び掛けていきたいと思えます。



### 母校の思い出

過去を生き 今を生き



高19回 大竹 喜士郎

約半世紀前のあれこれ思い出す。巻紙で張り出された合格発表。三〇〇名を超す団塊世代の大人数。明治的情緒漂う講堂での厳かな入学式。その講堂で先輩の日大教授から特別に受けた音楽授業。職員玄関から講堂に至る一直線の通路。幾多の人間模様と喜怒哀楽を包み込んできた木造校舎。指導スタイルは各人各様で、厳粛な中に自信が漲っていた先生方。様々な個性を持った学生像と自律を促すおっとり型の校風。一年次には東京オリンピック。柔道部所属だったお陰で岡野先輩の優勝。パレードに便乗。友の影響を受けて本の虫になったのもこの時期。三年夏には戦後初の甲子園出場。アルプススタンドで味わった一体感。口ずさむ校歌に頭れる竜一魂。秋の体育祭では、校訓の下、全学年縦割になつての応援合戦。冬には、額に塩噴きなが

ら二十キロマラソン。思い浮かぶすべてが懐かしい。思い返せば、竜一の良さは誰をも受け入れる懐の深さ。学生一人一人の生き様が一目バラバラに見えて、それらが適度に調和し、変に齷齪しない竜一高氣質。一種のDNA。時を経て母校に奉職。卒業生であることを意識しての勤務。十六年間で、様々な個性・才能を持った生徒たちに出会えたことは何にも代えがたい。さらに、部の顧問として平成二・三年連続甲子園出場の機会に恵まれたことは大きな宝。当時の持丸監督にひたすら感謝である。

縁あつて教員生活最後の四年間、母校の長として勤務。歴史と伝統の重みを改めて知ることになり、学校力の向上と文武両道・文武不岐の精神を継承し発展させることが使命であった。しかし、歴史を刻む緊張感も愉しいことであつた。

若木の現役生に届けたい。「エバーオンワード」。周囲の喧騒から離れた白幡台で学べることに感謝あれ。そして、今為すべきことに意を注ぎ、二度ない人生を有意義に歩めよ。「路行かざれば、到らず。事為さざれば、成らず」です。

ひと夏の思い出



高 19 回 塚本 賢治

私が三年生、まさに受験勉強真っ最中の昭和五十一年夏、我が竜ヶ崎一高野球部は見事東関東大会を制し、戦後初の甲子園出場を果たしました。優勝パレードを観て、涙の出るほど感激したのをよく覚えています。

パレードの翌日、学校から招集が掛かり、「我が校には今まで吹奏楽部は無かったが、応援団にブラスバンドが無いのはいかにも寂しい。楽器は直ぐに調達するので、中学の経験者を集め、急遽結成したい。」とのこと。

一年生〜三年生まで中学時代のブラスバンド経験者十六名が集められました。

私はトロンボーンを担当していましたが、何せ三年ぶりの演奏、しかも試合当日まで十日足らずしか有りません。

楽器が揃った翌日から連日猛特訓(朝八時から暗くなるまで)が始まりました。上唇が腫れ上がり鼻にくっ付いた記憶があります。何とか六、七曲をマスター出来ま

したが、技術レベルは言わずもがなです。

それでも土気は高く、意気揚々と甲子園に乗り込みました。

当時、東名高速は未だ存在せず、前日夕方バスで出発し、一晚中国道一号线を走り続け、翌朝試合前に到着するような状態でした。

初戦は沖繩興南高校でしたが、当時沖繩は未だ日本に返還されておらず、また鹿児島勢を破って初出場ということもあり、我が竜ヶ崎一高の応援席以外は、全て興南高校の応援団と化している様な状態でした。

試合中、我々は少ないレパートリーを繰り返し、繰り返し吹き続けました。

試合は接戦となり、延長戦の末、六―五で見事勝利しました。

二回戦は報徳学園に敗れましたが、堂々と戦った野球部員の勇姿は、今でも心に焼き付けています。

もちろん我が母校の思い出は沢山ありますが青春真っ只中の鮮烈なひと夏の思い出として、この話を書かせて頂きました。

私の文明開化



高 19 回 田坂 由美子

朝夕に秋の訪れを感じる九月半ば、私達同級生仲間には「持丸監督の御苦労さん会」に集まりました。持丸修一監督が、今夏、専修大松戸高を率いて念願の甲子園出場を果たしたお祝い会を催したのです。

私達十九回卒業生は、高三の夏、この持丸監督を含む当時の野球部が、実に四十四年振りの甲子園出場を果たすという歴史的な一幕に立ち会うことができた学年だったので

す。私達一般生徒も俄応援団を作ったり、急拵え吹奏楽部で何とか応援合戦に花を添えたり、バス十数台を連ねて大阪へ急行したり…大変エキサイティングな夏を過ごしました。

それ以後、私達の年代は、監督に就任された持丸君を応援しつつ、共に夢を見させていたたくという幸運を享受し続けております。

私達の世代は、昭和二十三年二十四年生まれが中心の、いわゆる「団塊の世代」で、何をやるにも人数が多く否応なしに競争社会という原理の中

で、個々の価値観や生き方を身につけていったように思います。

最近の竜一高と違って、当時は一学年約二五〇名中、女子生徒は約一割、三十名位しかおらず、A〜F組までのクラスはE、F2クラスにしか入っていませんでした。今でも年一回、女性だけのクラス会を開いておりますが、当時男子生徒の中で埋もれていた(?!)"女性らしさ"を確認し合っております(?!)

高校は中学校と違い個性的な先生ばかりで、授業も興味も深かったことを覚えております。特に社会と理科は分野別に各科目化し、専門的でもしるくなりしました。個人的には世界史と生物、化学が好きでした。中でも、とても楽しみにしていた授業の一つが、松崎先生の古典でした。

大柄な男の先生でしたが、ハリのあるお声で毎授業五十分、一話完結の落語を聞いているようなおかしみがあり、最後に「オチ」を言い終える

と休み時間の鐘がなる、という絶妙さでした。その間に板書も右端から左端まで等間隔に要点だけ書かれていたというプロフェッショナルな授業でした。

後々、大変貴重な経験をさせていただいたと感謝しているのが、高一の冬休みのスキーでした。生物の佐藤先生と化学の大塚先生が、一三年の希望者を募って、山形蔵王へ連れて行って下さったのです。スキーが今の様にポピュラーなスポーツではない時代に、スキーの楽しさや冬山の美しさを伝えようとして下さった先生方の熱意を今でも折りにふれ感じております。最終日に頂上付近で見た、朝日に輝く眩いばかりの「樹氷」は、高校時代のモニュメントの一つとして私の中に在り続けております。

あの坂道の途中で



高 34 回 磯山 佳美

私が大学を卒業して、そろそろ三十年になるうとしています。

その間、ずっと高校の教員として働いてきました。現在の学校で四校目。どの学校でも、「順調なことばかり」とは言えないような気もしますが、私なりに頑張っ働いてきたつもりです。その間に、二人の子ど

もを育てて、それも「とつても立派に育ちました」と胸を張れるようなものではありませんが、やはり私なりに仕事と家庭との両立にベストは尽くしてきたつもりです。

大きくザックリと振り返ってみますと、「女性職業人としては普通の人生を歩んでいるのかな」と思います。そして同時に、「普通に生きるって、結構しんどいことなんだ」とも思います。

三十六年前、私は竜ヶ崎一高に入学しました。

数学が好きでした。周りには優秀な同級生がたくさんいました。「私は数学が好きなので、センスはないな」と、高校に入学して早々に気づきましたが、「負けないように勉強しよう」と思いました。ある日、先生から一回だけ、数学について褒められたことがあります。今でもそのことを覚えていてのですから、とてもうれしかったのでしよう。そして数学の教員になりました。

高校時代、私は竜ヶ崎一高の雰囲気になんとなく好きでした。どういふところが聞かれても上手く言えませんが、たとえば、一高の校舎に続く坂道を登るとき、歴史とか伝統がふんわりと私にも降りかかる

ように思える瞬間が幾度かありました。その度に何とも言えない良い気持ちになったのを覚えています。自由な校風は今も受け継がれているのでしょうか。一見のんびりしているようでも、こごとというときに力を発揮できる、そんな学校だったなあと記憶しています。

私は今、勤務している学校で学年主任をしています。きつと竜ヶ崎一高でも似た光景でしょうが、主任として、「勉強しよう」とか「センター試験はね…」と生徒に話す毎日です。かつて私が励まされたように、「人生はこれからよ。『自分を生かす道はこれしかない』そんな道を見つけて。」と背中を押していくことが、私の役目と考えています。

在学中これといった取り柄もなかった、こんな小さな(特に才能に恵まれていない)私ですが、気持ち一つで胸を張ってやっていけると信じています。竜ヶ崎一高OGとして、それを体現するためにも、これからもあの坂を登るように、じっくりと歩みを進めていきたいと思っています。

居心地のいい空間



高 34 回 早乙女 剛

「なんという所に来てしまったのか。」

入学直後の緊張感が少しずつほぐれ、教室内をよく見渡せる状況になった時に感じた気持ちであった。我が一E教室に飛び交う言葉に、生まれも育ちも「取手」の自分にとつて驚きの連続であった。

「オレよ、昨日よ…」という会話が聞こえてきた。その話し手の方へ目を向けると、なんと自分のことを「オレ」と言いながら、楽しそうに話をするその人は、女子ではないか！近所のばあちゃんであれば、「オラさのほうでよ、…」などの言葉はよく聞いていたし、所詮茨城多少の訛りでは驚くことはない。しかし、ここは竜ヶ崎第一高等学校第一学年E組の教室、これからの生活を輝かしいものにしようと、多少なりともかつこつけて「ちよつとよそ行きモード」であるはずのこのタイムミングで、女生徒が「オレよ」とは本当に衝撃であった。

またある日、今までに聞いたことのない単語が耳に飛びこんできた。

「アヨ、アヨ…」  
「アヨ、アヨ…」  
「アヨ、アヨ…」  
「アヨ、アヨ…」

再び同じ声に振り向いてみると、「ねえ、ねえ」と話しかける時に行う手招きする動作をしながら自分に話しかけているではないか！これは人に話しかける時に使う言葉なのだ！国語を得意科目とする自分の単語データの中に「アヨ、アヨ」はなかった。

これ以外にも新しく出会った単語は数知れない。中でも揺らぐことのないナンバーワンは、「けつたくりマシーン」(マシーンっていったい何時代の言葉なんだよ。)教員である自分は、国語で方言の学習をする時や低学年の授業の填補に出た時に、とつておきのナゾナゾとして出すが、まず正解は出ない。  
このように、言葉のカルチャーショックを数多く受けた教室であったが、数カ月いや数週間その場にいると、あれだけ衝撃を受けたことがまるで夢であったかのように何の違和感もなく心地よい空間になっていた。自分は一年

生の夏休み以降、ドクターズトップがかかり、自分の体を思うようにコントロールできないという状況の中、ふてくされて誤った方向に進むことなく生活できたのは、このユニークで心許せるメンバーに恵まれたからであろう。

卒業後も定期的が集まっているメンバーがいる。話している時の気分は、あの当分のままであるが、話題の中心はいつしか健康や体調のこととなり、五十代の同窓会的雰囲気かじみ出る。しかし、気心を許せるこの集まりは安らぎの場であり、これからも大切にしたい。

笑ったり悩んだり

高34回 松浦 範子  
遠方から来客があった時のこと、近所の神社や小貝川を散歩してふと思いつき、白幡台を訪ねたことがある。竜一という母校にはどこかそんな気にさせるものがあるらしい。

高校時代の私は、入学して早々授業をさぼり武道館のコンサートに行ってしまうような不真面目な生徒だった。自習時間には音楽室でピアノを弾いていたり、昼休みには学校を抜け出してラーメンを食

べに走ったなんてことも。だがそのくらいなら目をつぶってもらえた(と思っている)、古き良き時代のおおらかさというか適当さというか、が当時の竜一にはあって、そんな学校が私は好きだった。

天体観測や地学部キャンプに参加したくて入った地学部では、天気図の書き方をまず教わった。机にかじりついて地図上に各地の気圧や天候の数字・記号を記入してゆく作業は、ある種のゲームのようでとても面白かった。また部屋には暗室があり、一時期夢中で写真の現像をしていた。画像は天体観測の際に望遠鏡で覗いた月のクレーターや星などでなく、チョビ髭をつけたり持っていたお金をチラつかせたりして撮った自分たちのふざけた写真ばかりだったと記憶している。

ひとに「母校の思い出」を訊ねると、茶道の教諭の「お花がありませんわね」の一言に、校庭の桜の太木によじ登り一枝折ってきたという武勇伝あり、破門された恩師の前で来る日も来る日も正座して過ごしたという青春を絵に描いたような逸話あり。

その一方で、言葉にするほどのものではないけれど、誰

もが持つであろう、日常の風景、登下校時の会話、授業中に回しあった小さな手紙や教科書を汚した落書きなどの記憶。笑ったり悩んだりの日々を一緒に過ごした仲間たちから受けた影響は計り知れない。

細かいことをよく覚えていてる旧友に会いたくなってきた。私が忘れてしまっている奇談の数々を、きつと面白おかしく思い出させてくれるに違いない。

高校時代を振り返って



高 49 回 持丸 信彰

竜ヶ崎一高での思い出といえば、硬式野球部に所属していたこともあり、放課後のグラウンド、そして部室での思い出がほとんどです。

昼夜を問わず、仲間達と白球を追いかけた日々は、辛いことも含め、かけがえのない青春時代の宝物になっていきます。

その中でも印象に残っているのは、夏の甲子園大会出場をかけた茨城県大会です。

二年生のときは、決勝戦まで駒を進めました。水戸商

業に二対三というスコアで敗れました。水戸市民球場で行なわれた決勝戦は、地元水戸商業との対戦ということもあり、独特な雰囲気だったことを記憶しております。

私達の代では、秋・春とそれなりの成績を残し、シード校として最後の夏の大会に臨みましたが、初戦でまさかの敗戦を喫し、儂くも甲子園出場場の夢は破れました。

チームを率いる立場になつてからは、うまく軌道に乗せることができず、苦悩の日々が続いたことを思い出します。その頃は、練習帰りに寄るコンビニでのひと時が、安らぎの時間でした。

一方、学校生活では、なぜか勉強に勤しんだ記憶がありません。テストでも毎回散々な結果でした。

しかし、授業の合間のふとした先生の雑談は、いまでもよく覚えています。大学で生涯の伴侶を見つけたという話や、アメリカ旅行で飛行機に乗り遅れた話など、さまざまなエピソードが大変人生勉強になりました。

竜ヶ崎一高での日々は、部活動を含めた学生生活の随所で教育の理念が感じられ、その先の人生で多くのことを学

び、吸収していく素地を作ることができたと感謝しております。

最後になりますが、いまでも野球部でない同窓生に会ったときに、高校時代の思い出として「夏の高校野球応援」を挙げてくれることがあります。改めて野球部への注目度の高さを感じるとともに、感謝の気持ち溢れてきます。現役時代には貢献できませんでしたが、野球部OBとして微力ながら古豪復活へ尽力し、竜ヶ崎一高をさらに盛り上げたいと改めて思いました。

私の歩む道



高 49 回 青田 美由希

竜ヶ崎一高は、私にとって憧れの学校だった。合格を知ったときは、目標が達成できたことへの喜びと、自分と同じ思いで入学してくるであろう新しい仲間との生活が始まることへの期待でいっぱいだった。

入学式では、初めて聞いた校歌に驚いた。小学校、中学校の校歌とはまるで違う荘厳な響きから、伝統を重んじる

校風を感じた。「自分も先輩達のようにがんばらなければならぬ」と、背筋がぴんと伸びたのを覚えている。

竜一では、尊敬できる先生方に出会った。古文の授業はわかりやすく、一文一文を現代語に訳していくことが楽しかった。部活動の疲れからか、つい居眠りをしてしまうクラスメイトにも優しく声をかけ、一人一人に丁寧に向き合ってくれてくださったことが嬉しかった。教えることへの興味が芽生えたのは、ちょうどこの頃だった。

現代文の授業では、文学作品を読み味わうことの奥深さを熱心に語ってくれた。情熱をもつて教えれば、学ぶべき内容だけでなく、教科そのもののおもしろさが伝わるのだと感じた。これがきっかけで、「どう教えるか」に関心をもつようになった。自分が好きなことを職業とすることの素晴らしさも知った。

私は今、小学校教諭として、大好きな子ども達と共に毎日楽しく過ごしている。過去に受けもつた子ども達の中には、すでに成人している子もいる。果たして、自分はその子達の人生に、少しでもよい影響を与えられたのだから

うか。竜一で出会った素晴らしい先生方のことを思うと、いささか不安になる。

日々の生活に追われ、高校時代の仲間と会うことは少なくなってしまうが、時々思わぬ場所ですれ違う。自分の職業を大切に、生き生きと活躍しているのを見ると、同じ母校で過ごせたことを嬉しく思う。そして、「自分もがんばろう」と元気をもらおう。私達の歩む道を与えてくれた竜ヶ崎一高に、心から感謝している。

高校時代の思い出



高 59 回 吉田 雄哉

「夏の野球応援。仲間の全力プレーに、声が枯れるまで応援した。試合後、サインが挨拶に来たときには涙が流れた。」

平成十九年三月一日卒業式。緊張の中で読み上げた答辞の一節。しんとしていた体育館に、こらえていた音が溢れた瞬間。壇上にいる私は背中で、確かに聞いた。おさえきれない想いが溢れる音を。私達が伝統ある竜一に入学

したのは、紙幣のデザインが一新された平成十六年のこと。その頃は、高校生ともなると携帯電話を持つていたのが普通であった。SDカードには、当時の懐かしい写真がたくさん残っている。クラスメイトと弁当を囲んだベランダ。部室での団欒。合宿での友人の寝顔。想いを寄せたあの夕日。白幡台から望む美しい夕日。三年間が本当に充実した日々だったと思う。この三年間でみんな「竜一」になる。それぞれの形で「竜一」を胸に抱いていく。

高三の六月はW杯中田英寿の引退、ではなく白龍祭の話題で持ち切りだった。本気で仲間と取り組んだ半年間で、言い尽くせない程の体験をすることができた。この経験は、今の私の土台となっている。たくさん面倒見ていただいた岩崎先生や生徒会に入るきっかけをくださった菅原先生、駆け付けてくれたOBの方々には感謝し切れぬ思いだ。

「いや、お前ら。最後のドッキングだぞ。」模試の判定に青ざめた夏。苦しい受験勉強の日々も仲間と遅くまで教室に残ることで乗り越えられた。振り返ると、どんなことも、それなりに努力した。

もう一度やってみると言われてもできないだろう。それができたのは、若さ故の勢いか。いや、支えてくれた友や先生の存在。人に恵まれたなあとしみじみ思う。無我夢中でアツくなれた高校生活。改めて、卒業式に泣ける高校生活でよかったと心から思う。

高校時代の思い出



高 59 回 大野 豊司

卒業してから九年目を迎えた今、母校での生活を振り返ると様々なことが思い出され、私にとって切り離せないものばかりです。あれもこれもと色々なことを欲張り、様々な事を経験させていただきました。

今でも鮮明に思い出されるのが三年生の白龍祭です。産みの苦しみと、その先に待つ充実感を味わった忘れることのできない経験でした。十二月にスタートした準備期間の

間に会議を重ね、本番が近づけば夜遅くまで残って準備をしていました。私はセレモニーを担当し、良いものを作り上げられるかは自分たちのアイディア勝負というなかで、本番まで悩みは尽きませんでした。悩むなかで、岩崎先生、木内先生やスタッフなど多くの人に支えられながら企画をつめていき、本番でも多くのスタッフの協力や生徒の参加により、良いものを作り上げることができました。答えのないものを作り出すことの苦労を超えて共に白龍祭を作り上げた仲間と感じた充実感や閉会セレモニーのジェット風船の飛び体育館の天井の美しさは何物にも代え難いすばらしいものでした。

現在、私は東京で教員をしております。高校卒業を前に、教職の道を選ぶと決めたのも、先生方にご指導していただくなかで、教職という仕事のやりがいを感じたからです。大学四年次には教育実習を行わせていただき、三週間という短い期間でしたが、先生方の働く姿勢や生徒との関わりを教員という立場で経験し、教職を目指す気持ちを一層強くしました。今勤務している高校は母校とは環境が大

きく違います。生徒を思う教員の姿勢や答えのないものを生み出すために努力することは、竜ヶ崎一高で学んだことが基礎となり、活かされています。最後にになりましたが、恵まれた環境を作っていたいただきました担任の辻先生、菅原先生、教育実習でご指導いただきました吉田先生をはじめ多くの先生方に感謝し、母校の益々の発展を心より祈念しております。

母校と私の人生

無銭の旅のはじまり



高 10 回 井原 哲夫

五十九年前、竜一高二年の夏休みのことであった。叔父の話に刺激を受け、房総半島一周の自転車旅行を計画した。五人の仲間がすぐに集まった。親戚でテントを借り、米、味噌、飯盒、水筒とそれぞれの家にあった野菜、缶詰などを荷台に積んで朝六時に出発した。はじめの冒険の旅である。不安は感じなかった。利根川を渡し船で渡り、成田を通り、



の繁殖地を発見しました。それ以来お陰様で龍ヶ崎市では野鳥と言えば海老原龍夫になりました。現在馴染小学校、龍ヶ崎小学校、八原小学校へは定期的に校外野鳥のおじさん講師として務めています。バードピア運動に参加した龍一高にも協力しております。

龍ヶ崎市倫理法人会相談役  
龍ヶ崎バードウォッチングクラブ 名誉会長  
日本野鳥の会 茨城支部幹事

人生、何が起るかわからない。だから目先のことに一生懸命に！



高 28 回 回  
川原田 邦彦

竜ヶ崎一高を卒業して早いもので約四十年、気が付くとあつという間でした。六月の留守中に牛久栄進高校の副校長先生が見えたと言われて、仕事の話?と思いましたが、名刺を見ると記憶にある名前、友人でした。後に話を聞くと「白幡」に寄稿してくれとのこと。迷いましたがせっかくのお話だし、受けてしまいました。学校に入る時、校歌にもあ

りますが、「石段登る六十余」とおりやはり印象に残り、また伝統を感じさせる正門、思い出されます。当時、消極的な性格で(今もたいして変わっていませんが)部活をするわけでもなく、先生方にとっても印象に残らない地味な生徒だったと思います。在学中に野球部が甲子園に行ったことは誇りであり、現在も県大会は時間が取れば球場に行くことが楽しみの一つになっています。

三年になる時のクラス分けでどうしても理系にいきまかったので、ついいてしまいました。これが非常に学生生活を苦しむ原因になり後悔したものです。ただ卒業時にはいい仲間もでき、理系で良かったなと思つた次第です。卒業後は希望通りの大学を出て、家業を継ぎ現在に至ります。地方のちっぽけな植木屋ですが、人には経験できないことをやらせてもらっています。本を出版していること、テレビに出ていること、大学で非常勤講師をさせてもらつたことなどです。本は専門書ですが、背表紙に名前がついているものが約三十冊。想像もしなかつた仕事です。近年はインターネットの普及など

で、さすがに数は減つていますが。もともと書くことは好きで、地方の広告誌などに書いていたくらいだったので、だんだん本の四分の一ページとか半ページとか。そこから一冊の本の依頼がきたことが始まり(でも本を書くとはまったく思つていなかった)で、気が付いたらこういう数になっていました。読者からは「他の先生の書いたものとは違う」などの高評価をいただいで、非常に嬉しく思っています。テレビは父親が出ていたのでいつか出たいと思つていましたが、数多く出させていたでいています。

大学に關してはこれこそ雲の上の話で、考えてもみない話でした。私が教えたのは東京農業大学で、この学生は「純真ですれていない」(いろいろな方からもそういわれまします)こともよかつたのかも知れませんが、話もよく聞いてくれて楽しく講義をさせてもらいました。

学生に心に留めてもらいたいことは、『人生何が起るか分からない。だから一生懸命やりなさい』。実習でも大学生は将来を考えているので、自分に関係ないことはお座なり

に、仕方ないからやるんだという意識はあります(自分がそうでしたから)。『だからこそ関係ない学生は、一生のうち、これでもうやらない可能性が高いです。だからそういう学生こそ一生懸命やるんだよ、そうすれば面白くなつて違う道も可能性が出てくるから』。どう感じているかは分からないけれど、いつかそんな時がくれば思い出してくれるかなど。実はここに母校の後輩が入学してきて、先輩の先生方のそういう時を見ていて、そんな立場になるとやっぱり気になつてかわいいものだかつて実感しました。私の講義に付いてきてくれた学生はすべてそうなのですが、さて現在ですが、私の仕事は非常に厳しい状況にいます。それは好景気の時のものだからなのですが。私たちはそういう風には考えませんが、多くの方は必要だとは思つても、縁にまで気が回らないのが現状です。しかし、環境は良くなることは全くないと思われまます。その環境に一番近い所にいるのが私たちですから、今後の花形にならないといけない仕事です。例えばC.O.削減にアイドリングストップということは多くの

方が知っています。では一日六分間アイドリングストップをして一年間続けた量と、3mの樹を三本植えた量が同じだと知っている方はどれだけいるでしょう。多くの企業は環境問題を頭に出すと仕事に繋がるとは実践していません。また中高生は環境のことはすぐ考えています(でも資源のリサイクルとか無駄使用とか)。植物の大切さを再認識してもらうことを表に出し、環境を少しでもよい方向にもつていける最大の仕事をしている一員として、ことが、厳しい時代を乗り切る糧と考えていることを知っていただければ幸いです。

確定園芸場代表(株)鳩の樹代表 泉南造園土木(株)代表 NHK趣味の園芸講師

外国から母校に思いを馳せる



高 29 回 回  
玉造 守

私は平成二十六年三月まで三十四年間県立高校の英語教師をしていましたが、事情により定年を待たずに数年早く退職しました。現在はアメリカ合衆国の永住者となり、

ピッツバーグ近郊に居を構えています。

仕事も変わり、新たな気持ちで再挑戦しているところですが。長年英語を教えていたにもかかわらずなお言葉の壁、特にリスニングの壁は如何ともしがたく、悪戦苦闘の毎日です。

ピッツバーグは、USステイル社などの鉄鋼業で隆盛を極めました。現在はハイテク、保険、金融、サービス業を中心とした地域経済に移行し不況からの再生を果たしています。また医学系で有名なピッツバーグ大学や工科系ではアメリカ有数のカーネギー・メロン大学など多くの大学が存在し、教育分野も充実しています。スポーツで盛り上がる土地柄でもあり、特にフットボール、野球、アイスホッケーなどは熱狂的なファンが大勢います。世界で二番目に橋が多い街(ベネチアに次いで)で景観が美しいところですので、機会があればぜひ一度足を運んでみてください。

さて、私が入学した昭和四十九年は正門を入ると左側にまだ木造の旧校舎が一部残っており、他にも駒杵勤治の設計になる講堂をはじめ、旧図書館、旧柔道場、旧体育館など

など昔を偲ばせる建物がまだありました。清掃当番で旧校舎を掃除していた折には、竜一

高の歴史をそこはかとなく感じ、感慨深い気持ちになったものです。大文化祭、小文化祭(白幡祭、白竜祭)、そして隔年実施の体育祭も思い出します。体育祭では仮装行列などもおこなわれ、新入生の我がクラスは当時の世相を反映させ「ロッキード疑獄」を揶揄する大きな

ピーナッツとリヤカーを骨組みにした巨大な飛行機を作成し、大得意でグラウンド中を引っ張りまわしたことを覚えていています。前日から学校に泊まり込みでの制作でした。今ではまず許可されない問題行動でしょうが、当時はまだ男子校の趣があり、そうするのが当然のような雰囲気だったので。文化祭では英語部が齋藤佳郎(前同窓会会長)先生のご指導のもと、英語劇「白雪姫」を上演し、私も小人のグランピー役で出たのも良い思い出です。勉強の面でも乱戦時代、受験戦争などという言葉がすでに声高に叫ばれていました

が、夏休みの英語の課外授業も例えばギリシャ神話などを題材としたもので、受験への即戦力というより、いわば教養に重きを置いた題材をあえて選ば

れていた向きがあります。全般に今と比べればまだまだ余裕があった時代でした。運動部の活躍も目覚ましく、硬式

軟式野球部の同時全国大会出場をはじめ、たぐさんの部が全国規模の大会で活躍していました。現在でもその伝統が脈打ち文武両道、文武不岐の校風となっているのは周知のとおりです。

昭和六十三年から平成九年までの十年間は母校に勤める機会を得ました。その間、多くの生徒たちや先生方と出会うことができ、大変幸運でした。竜一高は東京でオリンピックが開かれる二〇二〇年に創立一二〇周年を迎えることになり、その長い歴史と伝統は今後も継承され、ますます各方面でその名を轟かせていくことは間違いないでしょう。新旧を象徴するこの二つのイベントが重なるのは偶然とはいえ、歴史は常に新しいものに引き継がれていくものだということを感じざるを得ません。

最後になりますが、今日もあの石段を登り降りする後輩たちが今後も大いに活躍され、竜一高が益々発展されますことを外国の地で祈っています。

元竜ヶ崎一高教諭

竜一での経験 今の自分に活かされて



高46回 横田 修一

伝統ある「白幡」同窓会会報に寄稿させていただく機会を賜り感謝申し上げます。

最初に自己紹介をさせていただきますと、私は高校四十六回の卒業生で、硬式野球部が平成二年、平成三年の二年連続で甲子園に行った年の二年目に入學しました。現在は、地元龍ヶ崎市の塗戸町で水稲の生産を行う農業生産法人の代表を務めています。

まず、私がなぜ今回寄稿を依頼されたかということから説明をしますと、おそらくは一昨年の十一月、平成二十五年度第五十二回農林水産祭農産部門にて天皇杯の受賞という農業界では最高位の賞をいただいたので、そのことを書いてほしいというのが依頼してくださった事務局の方の意図であろうと思います。です

ので、農林水産祭とは何か、天皇杯とは何かの説明から始めようと思います。「天皇杯」と聞くとサッカーや競馬が有名ですが、二十余

りの天皇杯がある中でスポーツ以外では農業だけが下賜されています。詳細は日本農林漁業振興会のウェブサイト(<http://www.atfsk.jp/>)を参照いただければと思います

が、農林水産祭というのは、全国で農業関係の表彰が一年間に四〇〇ほどある中で、さらにその中から上位三者について天皇杯、内閣総理大臣賞、日本農林漁業振興協議会長賞の三賞を決めるもので、農産、園芸、畜産、蚕糸・地域特産、林産、水産、むらづくりの七部門に分かれており、少し言い過ぎかもしれませんが、その年の農業分野の日本一を決めるというものです。昭和

三十七年の第一回から始まった中で、茨城県内での受賞者も私で三人目という大変希少な賞になります。

天皇杯の受賞の理由については、私が行っている農業経営の中の様々な取り組みについて総合的に評価されたのですが、特に注目されているのは少ない農業機械と人員で大規模な面積を効率よく栽培している点で、具体的には、一台の田植機・コンバインで一〇〇haを超える面積の作業

を行っています。皆様ご承知のとおり、農業

従事者の高齢化によってリタイアする農家が増える一方で、私のような地域農業の担い手が農地を借り受けて、従来では考えられなかったような急激な規模拡大をしていて、受け皿となる担い手の体制作りが全国的にも重要な状況になっていますが、一方でお米の市場価格は下がり続けていて、大幅なコスト削減も同時に求められる時代になっています。

私自身は、急激な規模拡大という経営環境の変化に柔軟に対応してきただけのつもりでしたが、農業界の一般常識からはかけ離れた経営スタイルになっていったようで、人と違うことを強く意識していたわけではありませんでしたが、自分の置かれた環境や持っている資源・能力を最大限に発揮させようと苦心をした結果であります。

このような状況は、ちょうど高校時代の三年間、バレーボール部の中で経験したことと重なっているように思えます。私の学年は身長もそれほど高くなく攻撃力が低い上部員も少なく下の学年に頼らざるを得ない状況で、普通のバレーボールのプレースタイルでは、練習試合をしても軒

並み負けてしまっていました。その状況の中で、当時監督だった久保田純男先生の指導によって、ネットの両端をいっばいに使うトス回しで相手のブロックをかわす戦術を導入し劇的に変化を遂げ、強豪校とも競り合えるようになりました。

久保田先生におかれましては、昨年末に不慮の事故により他界されました、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

私が高校時代にバレーボールを通じて学んだ、現在お

れた環境の中で、自分の強みを見出して最大限に発揮させることで道が開けるということとを、結果的には現在、私が行っている自身の経営の中に活かされていると感じています。

高校一年で部活に明け暮れる息子を見て、竜ヶ崎一高に通っていた頃の自分と重なり、しみじみと感慨深く思い出しました。

平成二十五年年度農林水産祭 農産部門天皇杯受賞  
(有)横田農場代表取締役社長

多士済々⑤

母校に建つ歌碑

大野誠夫

生誕百年

高二回 鈴木 久



はじめに

龍中二八回卒の大野誠夫については四年前に同窓会会報『白幡』に書いたことがある。彼の歌碑は正門入ってすぐ左に建っている。

彼は河内町(藤蔵河岸)の出身、戦後の日本短歌界を宮柎二、近藤芳美らとリードした。一昨年は生誕百年、没後三十年に当たった。わたくしは町史編纂の過程で初めて彼の存在を知り、在校時代のことを調べにしばしば本校を訪れた。

琅玕のひとつまもりて  
歌碑には次の歌がある。

琅玕のひとつまもりて年経しと誰にか告げむ木々に鳥啼く

この碑は昭和六二年、彼が主宰した作風社が中心となって建てられた。敷地選定には、同窓生の海老原龍生君(当時市教育長後市長、故人)が尽力した。碑の裏面には、彼の経歴が刻まれている。

彼は旧龍中在学中、国語教師長南先生の影響で短歌に親しみ、卒業後画家を志したが、病気で挫折、その後苦難曲折の多い生涯を送った。歌集『薔薇祭』では、物語性や虚構を取り入れ独自の抒情世界を開拓、昭和五九年、六九歳で世を去るまで歌壇の第一線で活躍、中国の青緑の寶石琅玕の貴さを愛し、人生を生き抜く心の喩とした。



この歌は、彼が生涯を終えた年、歌集『水幻』からとったもので、その年現代短歌大賞を得ている。もう一首候補に上ったのが歌誌『ささか』に

に初めて掲載した歌である。街道に光溢れて春さびし荷曳ける馬は疲れてゐたり

歌集『花筏』の巻頭歌にもなっているが、「さびし」「疲れ」は生徒には不適ではと採用されなかったという。社会矛盾に目覚めた少年の純粋な気持ちをうたった歌こそ母校に建つ歌碑には相応しかったのでは。

藤蔵河岸の生家



彼は藤蔵河岸(河内町竜ヶ崎町歩)の回漕問屋で地主の「大野屋」の四男に生まれた。父三郎は、入婿で一時旧龍中の英語の教師を務めたことがあった。県内有数の大地主で、小作人が二二八戸、小作米千二百俵があったという。東京女学館卒の母糸いには九人

の子がいたが母乳で育てるこ  
となく、彼は小学校に上がる  
まで丸田の小作人に預けられ  
た。後年彼は人間が生涯に流  
す涙がコップ一杯ならば、幼  
時流した涙はその半分超えた  
と書いた。父母との確執は生  
涯続いた。

**旧龍中時代の 大野誠夫**



彼は昭和三年に龍中  
に入学した。  
父の書棚に  
あったシェー

クスピア・鷗外・漱石・一葉  
などを読み漁り、横光や川端  
の小説、プロレタリア文学の  
伏字の多い小説にも野鼠のよ  
うに齧り付き、「読まねば恥  
になるといった意識に追い立  
てられ」読み漁った。自伝的  
随筆『或る無頼派の独白』に  
は在学当時のことが詳しく書  
かれている。彼の全歌集と著  
作は本校の「大野誠夫文庫」  
に収められている。彼を短歌  
の世界に導いたのは、国語教  
師長南先生だった。中学二年  
の時、若いこの先生が赴任し  
てきた。「よく鍛えられた弾  
力的な体躯の持主」「テニス  
が巧い」「一種のさわやかさ  
は、教師の中で、群を抜いて  
いた」「教え方も巧い。適度

にユーモアを交えて、話を進  
めてゆく」と彼は書いている。  
彼は昭和六年から短歌結社  
「ささがに」に参加している  
が、その歌誌四月号に長南杜  
子夫選として「浅間農夫夫の  
ペンネームで六首が採られ、  
その最初の歌が「街道に」の  
歌である。この歌を起点とし  
て、彼の四十数年に及ぶ作歌  
生活が始まる。

**詩人 澤ゆきと大野誠夫**



中学四・五年の頃、友人に

澤ゆき(飯野酒屋ゆき夫人)  
の長男がいた。その友人を通  
じて彼は自分の詩稿を託し、  
卒業後も朱筆を入れて貰い、  
澤の蔵書を借り、藤村・有明・  
露風・朔太郎、さらには光太  
郎・犀星・安西冬衛・丸山薫・  
北川冬彦まで眼に触れる限り  
のものを読み漁った。澤から  
は添削とは別便で励ましの方  
葉があり「多読多作のほかに  
道がない」との書き添えがあ  
り、卒業後の就職まで心配し  
てくれた。

昭和二九年に朝日新聞茨城  
版の短歌の選者になったこと

を知った澤は会ったことない  
彼が「歌人として世に出たこ  
とは自分の誇り」と分厚い封  
書をよこした。一度も逢った  
ことのない男のこと、その  
優しい心遣いとに涙を流し  
た。彼が澤に初めて逢ったの  
は三年後の四三歳の時、澤は  
旧知の人を迎えるように歓待  
した。彼は澤が大事にしてい  
るものを無心した。それは澤  
が文学の道に迷って手紙を出  
した時丁寧な返事をくれた森  
鷗外の手紙の一通だった。

**兵たりしもの**

兵たりしものさまよへる風  
の市白きマフラーをまきみ  
たり哀し

この歌をもって大野誠夫は  
戦後彗星の如くに登場した。  
若い人にこんな歌も遺して  
いる。

戦争にやぶれし民の屈辱を知  
らざる世代伸びやかな四肢  
彼は「生きることの尊厳を  
歌いつづけてきた」と歌人篠  
弘は書いた。

**トピック**

**白幡台の樹木③  
―サクラ―**



幹が連なっていたこと。校舎  
南堤に十五本、グラウンド西  
堤に十九本もの桜樹があった  
ことである。白幡台の桜は大  
部分がソメイヨシノで、他  
にはシダレザクラ、ヤマザクラ、  
ヤエザクラ、シナミザクラ、  
イヌザクラ、ヨウコウザクラ  
がある。

毎年桜の季節が近づくと白  
幡台坂道の桜が気になりま  
す。その頃龍ヶ崎に行くこと  
がある時は、一高下の東西に  
走る市道を徐行して、開花の  
状況を眺めながら通過しま  
す。

ソメイヨシノは葉が出る  
前、木全体が一斉に開花し、  
やがて散る。まだ他の樹木が  
芽吹く前なので遠くからも分  
かりません。花芽一個から数個  
花を付けるので短期間に一斉  
に多数の花が咲くのです。  
今年八月の調査での印象は  
石段東側に広がった斜面には  
高木の本々の間に十八本もの  
桜樹も混じっていたこと。石  
段下や急カーブから坂道を眺  
めると三十四本もの太い桜の

桜植樹の記録は龍ヶ崎中  
学校史基礎年表を見ると、  
一九〇三(明治三十六)年新  
築校舎の一部落成、多数の樹  
木を校舎前と南東庭園に植  
える。一九〇七(明治四十)年  
石段東側平地に小園を造り、  
校地献納記念碑を移し、桜樹  
等十余株を植える。一九〇八  
(明治四十一年)桜樹四十五  
株を校舎西南の庭園に植  
える。一九〇九(明治四十二)  
年桜六十株を敷地全面及び車  
道に植樹。一九一六(大正  
五)年桜樹二七五株運動場の  
周囲に植樹と記されている。  
その後創立百周年記念に現代  
的な素晴らしい管理・普通教  
室棟が竣工した時、ブロック  
を敷き詰めた前庭にクスノキ  
と共に両側の植え込みに二本  
のシダレザクラが記念植樹さ  
れた。生物クラブOB会も  
一九九〇年頃、坂道と校地の  
南堤とグラウンド西斜面に桜  
を植え、二〇〇〇年にはシダ

レザクラを石段西の中腹に、ヨウコウサクラをいろは坂のカーブ周辺に植樹。さらに二〇一〇年にもヤマザクラとシダレザクラを武道館南側に植栽し、坂道にもソメイヨシノを補植している。

二〇一〇年四月の朝日新聞によると、ソメイヨシノの原木が特定できた。上野動物園表門に近い小松宮親王像の北側の桜四本である。また中村郁郎教授千葉大チームの研究でその像周囲の他の桜七本も全て同じ親から生まれた兄弟樹と判明、品種改良で人為的な交配で生まれた苗木をソメイヨシノと一緒に並べて植樹した可能性が高いとしている。サクラは自家不和合性で日本全国に植栽されているソメイヨシノはどれも種子が出来ず、実ることがあっても他種との雑種になり、親と同じ種類ではない。

文・木野内昭治 高13回  
写真・石引 督規 高25回



## 同窓会会員名簿の発行

「白幡同窓会会員名簿」は、平成二年の同窓会総会で五年ごとに発行することが決定されました。五回目の発行となります今回の会員名簿は二段組とし、平成二十七年三月の卒業回より

記載事項をクラスごとの五十音順記載に変更しました。また、各卒業回の幹事一覧を記載することにしました。母校への郷愁を誘い、会員相互の架け橋となる名簿を作成するに当たり、できる限り

正確な情報を把握することに努めてまいりました。今後とも、より正確な名簿にするため、引き続き住所変更等の情報を同窓会事務局までお寄せください。すようお願い申し上げます。

## 事務局から

### 協力金のお願い

部活動や学校行事等への援助をはじめ、会報発行や同窓会活動の活性化など、同窓会の事業運営などにつきまして、今後とも同窓生の皆様からご理解とご支援をいただきたく存じます。

つきましては、今回も「協力金」として二千円のご支援を賜りたくお願いする次第です。

お手数ですが、同封の協力金振込用紙にて協力金の振り込みをよろしくお願い申し上げます。

### 寄付金に感謝

次の方から白幡同窓会に寄付がありました。心から感謝申し上げます。  
高11回 川崎亮さんのご遺族

## 叙勲・褒章

### 受章おめでとうございます

#### 春

#### 旭日双光章

瀬尾 勇さん(高17回)  
元龍ヶ崎市議

#### 瑞宝単光章

瑞野 勝さん(高15回)  
元牛久市消防団副団長

#### 藍綬褒章

黒田 功さん(高20回)  
稲敷市消防団長

#### 高年齢叙勲

#### 瑞宝小綬章

内野 和夫さん(中41回)  
元東京・蔵前中学校長

#### 秋

#### 旭日小綬章

小林 靖男さん(高7回)  
元藤代町長

#### 瑞宝双光章

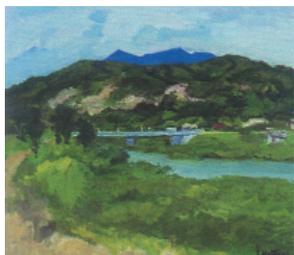
山口 勝さん(高15回)  
元県警部

#### 瑞宝単光章

辻井 泰雄さん(高15回)  
元警視庁警部

#### 藍綬褒章

大野 文雄さん(第6回)  
県交通安全協会副会長



筑波山



牛久沼湖畔の桜

## 所蔵美術品紹介③

25号から竜一高が所蔵する美術品を順次紹介しています。今回紹介する美術品は故服部正一郎氏(中21回)の二点です。服部氏の作品は本校に四点あります。

皆様もご存じのように、服部氏は二科会常務理事や日本芸術院会員として活躍され、勲三等瑞宝章を受章されました。

現在、竜一高本館一階廊下をギャラリーにして作家略歴を添えて所蔵美術品を展示していますので来校の折には、ぜひご覧ください。

# 進路状況

北海道大学	2名
東北大学	4名
筑波大学	13名
大阪大学	2名
国公立大学	131名
東京医科大学医学部	1名

本校では、入学期から卒業までの三年間を見通した教育プログラム「Rプログラム」(八年目)や「筑波大学研究委員会」(七年目)、「Rマス」(旧RMAST)委員会

## 平成27年3月進路状況一覧

◆国立大学合格者数

大学名	現役	過年度	合計
北海道大	2		2
東北大	3	1	4
福島大	6		6
茨城大	43	2	45
筑波大	10	3	13
宇都宮大		1	1
埼玉大	11	1	12
千葉大	5		5
お茶の水女子大	2		2
東京学芸大	1		1
東京工業大		2	2
東京農工大	1		1
電気通信大	1	1	2
新潟大	1		1
山梨大		1	1
信州大	1	1	2
静岡岡大	1		1
富山大	1		1
名古屋大		1	1
大阪大	2		2
島根大	1		1
九州大		1	1
青森公立大	1		1
茨城県立医療大	5		5
埼玉県立大	1		1
首都大東京	1	1	2
横浜市立大	1	1	2
都留文科大	4		4
京都府立大	1		1
兵庫県立大	1		1
名桜大	1		1
国立大学合計	111	20	131

◆主な私立大学合格者数

大学校名	現役	過年度	合計
自治医大	1		1
獨協大	15	2	17
文教大	8	1	9
青山学院大	7	3	10
学習院大	7	5	12
北里大	6	1	7
共立女子大	7		7
慶應塾大		1	1
国際基督教大	1	1	2
駒澤大	18	1	19
上智大	1	3	4
順天堂大	7		7
芝浦工大	16	4	20
成蹊大	12	3	15
成城大	5	3	8
専修大	8	5	13
中央大	11	6	17
東京医科大	1		1
東京女子大	13		13
東京電機大	27	2	29
東京農大	24	11	35
東京理大	14	10	24
東洋大	48		48
日本大	60	23	83
日本文子大	10		10
法政大	25	10	35
明治大	13	12	25
明治学院大	8	2	10
立教大	21	3	24
早稲田大	6	7	13
その他の	276	43	319
私立大学合計	676	162	838

生徒全員が、科学リテラシーを獲得し、将来の生き方にかざれていくことが期待されています。揺るぎのない進路指導の骨格と、その時々状況に合わせた細やかな進路ア

ドバイスや個人面談を加えて、本校の進路指導をさらに充実させたいと考えております。さて、今年度の大学入試を振り返ってみますと、大学入試センター試験は、新学習指導要領への移行に伴い、数学と理科において新課程に沿った出題に切り替わりました。但し、旧課程履修者への配慮もあり、新旧入り交じる複雑なテストとなっています。大学入試センターでは、ミスやトラブルのリスクを減らすために、高校別ではなく、受験科目数等により受験会場を分散させる方法で実施しました

が、本校は幸いにも全員が、例年どおり流通経済大学で受験することができました。センター試験の結果が発表されると、全国に衝撃が走りました。一つ目は、理科の「得点調整」が十七年ぶりに行われたことでした。科目間の平均点において二〇点以上の差が生じ、これが試験の難易差によって生じたものと認められる場合に実施されます。新課程導入の初年度とはいえ、選択科目で有

利不利が生まれる結果となりました。もう一つは、数学ⅡBの難化が挙げられます。全国平均39.31と初の三〇点台となりました。この影響を受けた本校生徒も少なからずいました。第一志望としてきた大学を諦めざるを得なくなり、志望校を変えた生徒が多く見受けられました。出願に際しては、センター試験の不本意な結果に生徒は悩みました。追いかけてきた「夢」を簡単に諦められず、一方で合格を勝ち取り受験勉強を終えたいという狭間でもがきながらも、決断を迫られました。

しかし、本校では当該学年の先生だけではなく、全職員で三年生を支える体制ができています。その結果、北海道大二名、東北大四名(うち現役三名)、筑波大十三名(うち現役十名)、大阪大二名、国立大合格者は一三一名(うち現役一一一名)を数え、六年連続で百名以上を達成しています。中でも、お茶の水女子大二名(いずれも現役)、他に東京工業大二名、九州大一名(いずれも過年度卒)、など難関大合格者が多数出ています。合格者のいずれも、センター試験の影響を受ける

ことなく高得点を確保しています。どんな問題にも対応できる確かな学力を身につけておくことが必要だということです。また、東京医科大学医学部は特筆すべきことであり、「Rマス」事業の成果でもあります。「茨城地域枠」による合格を勝ち取り、将来茨城県の地域医療に医師として貢献してくれることが期待されます。

一方、私立大学入試結果では、東京農大の合格者数が全国トップとなりましたが、全体的にみると厳しいものとなりました。早慶上智の一般合格をはじめとして、東京理科大やGMARCHについても苦戦し、厳しい結果となりました。また、センター試験の結果から安全志向の連鎖が働き、挑戦校の合格を勝ち取れなかったことも要因に挙げられると思います。センター試験で確実に得点できる基礎学力を身につけ、基礎力を土台とした記述力を含めた真の学力を獲得するには「不断の努力以外にはない」ということを痛感させられた入試となりました。

高野 健一(高37回)

# 先輩の語る仕事を聴く会

平成二十七年十月十日(土)

第一学年では、文理選択を  
考えるための取り組みの一つと  
して、毎年この講演会が行わ  
れています。今回は保護者二  
名と同窓生から八名を、人生  
の先輩としてお招きし、仕事  
のやりがいや面白さなどについて  
語っていただきました。講師の  
感想を紹介いたします。

## 明鏡止水?

有川 保氏(高33回)

弁護士

弁護士の仕事について、少  
しは理解してもらえたかと思  
います。生徒さんたちは真面  
目に聴いてくれて、こちら  
も話がしやすく助かりまし  
た。先週の向井千秋さんのお  
話があり、ノーベル賞受賞の  
ニュースがあり、と生徒さん  
には良い刺激を受ける機会が  
続く中で少しでもお役に立っ  
たなら幸いです。

## ものづくりの喜びと着想から 実現までのいろいろ

丹治 昭夫氏(高44回)

デンパン

本日は、高校生というフ  
レッシュマンの前でお話しす

## 銀行で働くということ

丸岡 政貴氏(高46回)

常陽銀行

本日は貴重な機会をいただ  
きありがとうございます。高  
校生にお話するのは初め  
てのことでしたので、できる  
だけのことはお話ししたつも  
りです。銀行の仕事は社会人  
にならないとイメージしにく  
い(接点がありません)ため、  
少しでも職業の興味の幅が広  
がってくれば幸いです。ど  
んな職業に就いても銀行とは  
何かしらの形で関わってきま  
す。生徒の皆さんが、自分ら  
しい職業と出会い、すばらし  
い人生のスタートを踏み出し  
ていただきたいと思います。  
ありがとうございます。

## 最大多数の最大幸福 という生き方

青木 隆行氏(高47回)

茨城県庁

本日は大変お世話になりま  
した。一生懸命聞いて頂き、嬉  
しく思います。このような機会  
に恵まれたお陰で、これまでの  
自分の歩みを再確認すること  
ができ、今後の励みにしたいと  
思います。最後になりますが、  
私は野球部出身ですので、近々  
の甲子園出場を願っております。  
がんばれ竜一!

## 変わるメディア、変わる出版 社、変わる広告

石原 輝明氏(高47回)

KADOKAWA

生徒さんの貴重な時間をご  
一緒させて頂きありがとうございます。  
話を聞く生徒さん  
の瞳があまりにも眩しく、身  
が引き締まる思いです。縮小  
しながら変化していく社会の  
中で、彼らとともに変化を希  
望へ繋ぐメディアでありたい  
と痛感しています。

## 人を動かす言葉

野澤 幸司氏(高49回)

博報堂・コピーライ  
ター

自分の作った作品がどの程  
度世の中へ届いているのか、  
生徒たちの反応を見て確認す  
ることができ、貴重な機会と  
なりました。面白いCMには  
ちゃんと笑い声をあげてくれ

たりするなど、生徒たちの  
まっすぐな反応に感動しまし  
た。もし、今日の話を聞いて  
広告というものの存在を意識  
してくれる人が増えてくれた  
ら何よりです。貴重な場を設  
けていただき、またこの場  
にお招きいただきありがとうございます。  
ありがとうございました。

## なぜ製薬部に入ったのか なぜ製薬会社に入ったのか

若林 康介氏(高59回)

アステラス製薬

理系志望が増えているとい  
う事で理系出身者としては嬉  
しく思います。文理選択前  
の会という事で、生徒さんの考  
えの一助になればと思いま  
す。毎年思う事ですが、若さ  
を頂いていてこちらも勉強に  
なる事が多いです。ありがと  
うございました。

## 病院における臨床検査技師の 役割

竹田 優香氏(高62回)

埼玉県三郷中央総合  
病院・臨床検査技師

この度は貴重な機会を頂き  
ありがとうございます。こ  
のような講演は初めてだった  
ので、ためになるお話ができ  
たのかは分かりませんが、自  
分自身、自分の職業について

考えること  
ができ、ま  
たフレッ  
シュな一年  
生と直接お  
話をするこ  
とで、初心  
に戻れたよ  
うな気がし  
ました。緊  
張しましたが、とても  
いい経験を  
させていた  
だし、あり  
がとうございました。



# 教室から

歴史を英語でプレゼンテー  
ションする取り組み

地理歴史科教諭 小野 威人

私が日本史を教えている二  
年G組は、「スーパードグロ  
バルクラス」(通称SGクラス)  
として、異文化体験や英語を  
重点的に学んでいます。「総合  
的学習の時間」で探究活動  
を行っており、日本史を担当し  
ている縁により四名の生徒(池  
上晃平、神立大輝、佐藤佑磨、  
米川司)と歴史の調査を行い、  
その成果を英語でプレゼン  
テーションすることを目的と

して活動しております。調査した地域は、私が定期的にお邪魔している常総市水海道地区です。第一回の調査が六月に行われ、生徒たちは専門家による指導のもと、古文書の整理と撮影の補助を担当しました。調査の目的は、江戸時代の思想家、鈴木頂行(すずきちやうぎよう)の遺した古文書類の整理です。

頂行は、不二道(江戸時代に流行した富士講の宗教的要素を除いた思想)の指導者で、国学者との交流から尊王思想さらには二宮尊徳の報徳思想に影響を与えたと考えられています。ところが、頂行は、歴史の資料にはその名がほとんど登場しない「忘れられた思想家」で、地元の人々にさえ業績がほとんど知られていません。

六月に行った調査の様子が、六月二十二日付け茨城新聞社会面に取り上げられました。生徒たちは、この記事をきっかけに調査の重要性に気付き、レポートとして頂行の業績をまとめようと七月に再度水海道を訪れました。現当主から聞き取り調査を行い、夏休みをかけて執筆を続けてきました。途中、執筆が進まず完成が危ぶまれましたが、九月十

日に発生した鬼怒川水害の被害場所が調査場所だったことから、「自分たちにできることはレポートを完成させること」と持ち前の集中力を發揮して、四〇〇字詰め原稿用紙に換算して二〇枚を超えるレポートを完成させました。題名は「頂行伝―常総市水海道の埋もれた思想家を発掘する―」、「Team Of Chogyo」のグループ名で、外部行政機関の懸賞論文に応募しています。現在は、十二月の発表会に向けてレポートを発表原稿に取りかかっています。四名の目標は頂行の業績を英語で世界に発信すること、好成績を残してもらいたいと思えます。



第一回調査(平成二十七年六月十四日)  
頂行の著書『勸善録』撮影

## 部活動状況

### 男子ソフトテニス部

#### ハイスクールジャパンカップ出場及び近畿インターハイニペア出場の快挙

六月に北海道札幌市で行われたハイスクールジャパンカップのダブルスの部門に、幸坂泰輔(二年)・山口和晃(三年)ペアが出場しました。ハイスクールジャパンカップに竜一生が出場するのは、二年連続三度目となります。茨城県予選会は、決勝で敗れあと一步のところで出場権を逃したかと思われましたが、大会主催者からの推薦を受けて、晴れて代表権を獲得しました。試合は立ち上がりから自分達のテニスをさせてもらえずに予選リーグでの敗退となりました。幸坂選手は、全国大会トップレベルの試合を二年生で経験することができたので、秋以降来春までの活躍が楽しみです。

また、七月末に行われた近畿インターハイに、幸坂泰輔・山口和晃ペアと原吉典(三年)・西田昂太(三年)ペアのニペアが出場しました。県の代表枠が六つであること

## 部活動奨励金

### 贈呈式

毎年、県外大会出場部活動に対して、大会ごとに二万円から十万円の範囲で「白幡同窓会部活動奨励金」を贈呈し経済的な支援を行っていきます。例年、この予算は百万円を計上しています。この奨励金は、全校集会で実施する壮行会において、白幡同窓会会長自らが直接生徒に贈呈しています。この贈呈式の実施は、在校生の白幡同窓会への認識を深める絶好の機会となっています。

今年度は五月二十五日に壮行会が実施され、男子軟式テニス部、射撃部、陸上競技部の県外大会出場へ向けて白幡同窓会の染谷信洋会長より奨励金が手渡されました。

白幡同窓会の目的の一つである「母校後援のための活動」に対して、各部活動の部員を初めとして在校生の皆さんの認識が高まってきています。



顧問 高野 健二(高37回)

矢口 博(高29回)



### 百十五周年

### SSH記念講演会

SSH担当 大西 武彦



十月四日(日)午後、百十五周年記念式典挙行後、龍ヶ崎市文化会館で、記念講演会として向井千秋宇宙飛行士に「仕事を通して学んだこと」(医師・宇宙飛行士)と題しご講演頂きました。本年度四月から東京理科大学副学長に

### キャリアサポートプラン

定時制教諭 石塚 善行

平成二十七年七月九日・十日の二日間にわたって、「いばらき県南若者サポートステーションつくば」のスタッフの方々をお招きし、キャリアサポートプランを実施しました。本校の四学年を対象に、進路の選択に対する考えをより深めることが目的の行事で、一日目の九日は、スタッフとの個人相談、十日は進路選択に必要な経験や知識を学ぶワークショップ活動でした。

就任され、お忙しい合間を縫って来て下さいました。当日は佐貫駅へ電車であら

れ、小林教諭と駅へ迎えに伺うと緊張する我々に「つくばにはよく来ますが龍ヶ崎は初めてです。とてもいいところですね。」と大変気さくで、明るくパワフルなお人柄が伝わってきました。会場到着後、ご自分でパソコンを設定され、恐縮している我々に「フォーマリティーは気にしませんから大丈夫」と。宇宙飛行士の行動力の片鱗を垣間見ました。講演では、群馬県館林市中

個人面談では、一人一人ていねいにお話と状況を聞いていただき、またワークショップでは、知識を上から教え込むと言うよりも、生徒同士が活動を通じて、自分が持っている能力や特色に気づかせるという内容のもので、生徒がとても楽しそうに活動していたのが印象的でした。終了後に実施したアンケートの結果も、生徒が充実した時間だと感じたことが確認できるものでした。その後九月に入り、就職志望の生徒は就職活動に入りましたが、面接の練習の際に、

### 生活体験発表会

定時制教諭 高野 陽輔

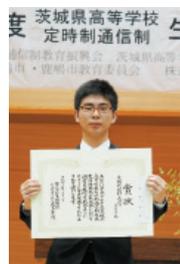
平成二十七年茨城県高等学校校定時制通信制生徒生活体験発表大会が、十月三日(土)に鹿嶋市大野まちづくりセンターで開催されました。生活体験発表大会は、定時制通信制に学ぶ生徒が、学校生活を

通じて感じ学んだ貴重な体験を発表し、多くの人に感動と励ましを与えることを目的として、長年にわたって実施されている行事です。今年の新山浩加校は十四校、発表生徒は十九名でした。

本校からは三年生の新山浩季君が「恩返し」というタイトルで参加しました。白龍祭の募金活動等で人の温かさに触れたことをきっかけに、自分の周りで支えてくれている

人たちへの深い感謝が芽生え、そんな人たちにいつかは恩返しをしたい、といった内容でした。心を込めてしっかりと伝えるために、暗唱や表現の工夫など準備を重ねました。

大会では緊張しながらも、ゆっくり落ち着いた大きな声で発表することができました。聴衆一人一人に目を配り、心に訴えかける素晴らしい発表でした。残念ながら全国大会への進出はなりませんでしたが、「茨城放送社長賞」をいただくことができました。ご支援くださったPTAおよび同窓会の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございます。



### 編集後記

前号の26号は紙面をA4判にし、24ページの会報として発行しました。

本号からは20ページの紙面とし、多くの会員の皆様に読みやすく、興味の持てる会報を目指して充実した紙面作りを努めてまいります。

つきましては、会員の皆様からご感想・ご意見・ご要望等をお寄せいただければ幸いです。

同窓会事務局の住所及びメールアドレスを第一面に記載してありますのでよろしくお願いいたします。

倉持 正男(高27)